

2017年 一般の部 最優秀賞

「8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心」を読んで

広島県広島市

岩森 久美 (いわもりくみ)

今年も又、暑い夏が過ぎました。時が経てば必ず涼しい秋が訪れると分かっているから暑さも耐えられます。ですが、原爆が投下された昭和二十年の夏は、先の見えない暗闇の中で人はどうやって過ごしたのだろうか？と、この季節になるといつも同じ思いがよぎります。

この本は、美甘進示さんが被爆後も生き抜いた体験が克明に描かれています。原爆投下後の惨状は二度と思い出したくない事実でしょう。それでもこうして一冊の本にまとめるほど細かく当時の記憶をたどってくださった、それはどんなに苦しかったのでしょうか。後世の人々に自分の二の舞をさせたくない、自分のような思いを人に味あわせたくないという一念で辛い記憶を掘り起こしてくださったのでしょう。

進示さんが重傷を負った体で、離ればなれになった父の福一さんを探しながら、あまりの辛さにつぶやいた

「もう死にたかった。死んでいる人達がうらやましかった。」

という言葉が私の胸に突きさりました。死んだ人達を見てうらやましいと思うほどの生き地獄の中におられたのです。それでも、再開した父の福一さんの

「進示さんに医療を受けさせたい、何とか助けたい」

という強い思いに支えられて進示さんは耐えてゆきます。

私はこの場面を読みながらずっと、進示さんが重傷であり父の福一さんは励ます側なのだと思いこんでいました。ですが、進示さんを医療施設に見送った後、父の福一さんの方が亡くなったと知りました。実は父の福一さんも弱っていたけれど、息子を助けたい一心で自分の体を支えていたのだと気づきました。福一さんの強く温かい愛に胸を打たれました。

このような父の大きな愛に包まれてきたからでしょう。進示さんは想像を絶する被爆体験をされても戦後、

「前を向いていたかった。敵が味方になるのを見たかった。」

とされています。さらに過去にとらわれず、広島市が国際平和都市となって未来の平和に貢献できるほど素晴らしいことはない、とされています。

そして進示さんの娘さんである著者の美甘章子さんもあとがきの中で、

「人を傷つけた側が報いを受けて苦しんだとしても自分の苦しみは楽にはならない。相手への共感と許す心こそが真の意味での自分の癒しになる。」

とされています。美甘さんご家族が、皆で憎しみの連鎖を断ち許しの心で平和に暮らしたいと願う心が伝わってきます。

私は水を飲みたいと思えばいつでも飲めます。体調を崩したら病院で診てもらえます。恵まれた時代に恵まれた社会で暮らしています。

それでも日々の生活の中で、誠意や努力が報われなかったり人に傷つけられたら、虚しさが心を占めます。マイナスの感情の中にたたずんでいたくない、愛に変えて生きてゆきたいと頭で分かっているけど心がついてゆきません。傷つけた人をなかなか許す事ができません。忘れるようにするのが精一杯です。今の私は美甘さんご家族の広い心から遠い所にいます。

そんな小さな私ですが、この本に出会わせて頂きました。進示さんの苦勞を愛に変えていく姿に感動しました。進示さんが死を覚悟した瞬間に

「南無阿彌陀仏」

と唱え仏様の慈悲を信じ続ける心に「生き仏」のようだと感じ涙がこぼれました。

この温かい本との出会いを大切にしたいと思います。

「人に共感し許す心」

わずかずつでも近づいてゆけたらと思います。一生の目標になるかもしれませんが、一歩一歩進んでゆけたら・・・それが私にできる平和への貢献であり、自分の心も楽になる道のような気がします。